2025 年度　総合政策学部 FD 活動報告

2026 年 3 月 4 日

太田和彦

総合政策学部では、2025 年度の FD 活動として、教学マネジメントの深化に向けた議論を掲げた。これは、FD 活動が教学マネジメントを支える基礎の一つに掲げられているためである（『教学マネジメント指針』）。これについて、南山大学でも 2024 年度より、学生がアセスメントテスト（GPS-Academic）を受検する体制が導入された。それに基づき、今後は「一人一人の学生が自らの学修成果を自覚し、エビデンスと共に説明できるようにするとともに、DP の見直しを含む教育改善にもつなげてゆくため、複数の情報を組み合わせて多元的に学修成果・教育成果を把握・可視化」することが求められる。

2025 年度は、(1) 全学 IR アセスメント（学修到達度調査・学修行動調査）の結果の検討と今後の改善、(2) 「学部 25 周年記念ワークショップ」で得られた卒業生の声の整理・活用という 2 回の FD 研修会を実施し、学修成果の可視化と学習経験の質向上に向けた論点整理・意見交換を行った。詳細は以下のとおりである。

・　<u>2025 年 7 月 16 日 第 1 回 FD 研修会</u>

IR 調査結果の共有と意見交換を実施した。『学修到達度調査・学修行動調査（第 2 回）』の学年別傾向（DP 認知/到達、授業参加、授業外学修、自主学習、課外活動、就労）を確認。課題（3 年次以降の学修時間低下、長時間就労等）と対応案（DP 再周知、注意喚起・支援導線等）を整理した。

- IR 調査は 2025 年 1 月に実施され、総合政策学科 1～4 年次在籍 1,166 名のうち有効回答 363 件（回答率 31.1%）だった。3 年次の回答率が 21.6%と相対的に低い点は、解釈上の留意点であると同時に、学年別の働きかけの必要性を示唆する。
- DP 認知・到達実感は全体として高い一方、3 年次以降に認知が伸びず、4 年次以上で「まったく知らない」が大きい（再周知の要）。授業参加は 1 年次で厚い一方、学年後半で履修負荷を最小化する傾向が明瞭（前倒し履修の可能性）。また、自主学習「0 時間」が学年とともに増大。ただし「自主学習」の解釈のばらつきがあり、定義の共有が必要。アルバイトの長時間就労（週 16 時間以上）が全体 38.2%で、4 年次では 48.6%に達する。先行研究レビューでも 15 時間超から負の影響が多く示されるため、注意喚起と支援導線が必要。
- 成果： IR 調査結果を学部 FD の議題として整理し、学年別の論点（DP 再周知、学修時間、就労、学生活動の場）を可視化できた。
- 課題： 3 年次の調査回答率が低く、当該学年への働きかけ（調査周知・授業内回答時間の確保等）が必要。DP 認知が 3 年次以降で伸びず、4 年次以上で低下する傾向が

あるため、進級・卒研開始等の節目での再周知が必要。学年後半での学修時間低下と長時間就労の増加への対応（注意喚起＋奨学金・相談窓口等の支援導線の明確化）が必要。

・ 2026 年 2 月 4 日 第 2 回 FD 研修会

2025 年 11 月 2 日に開催した、「25 周年 WS」の要点整理と活用検討を実施した。年表[1]の世代別の傾向分類と提案（NAP、縦横のつながり、PBL、学修環境、AI 等）を共有し、卒業生経験を在学生学習に接続する仕組みを議論。学習経験の核（違う世界／課題の詳細／協働成果物）を整理した。

- 年表（これまで）は、（1） 2000 年代：創成期と多様な国際経験、（2） 2010 年代：地域連携の拡がり、（3） 2020 年代：コロナ禍と回復、という 3 つの波として整理できる。世代横断で頻出したのは、国外・地域・学外演習・インターン等の”現場”経験と、ゼミ室や待ち時間等を含む出会い・共同作業。提案（これから）は、NAP の継続・拡充、学年横断・OBOG 交流、PBL/産官学連携、学修環境・制度の柔軟性（オンライン面接場所、ゼミ室、AI 活用等）、対外発信の強化に整理できる。学習経験のコアとして「“違う世界”があることを認識する」「課題の複雑さ・厄介さにふれる」「協働して成果物を残す」の 3 点が示唆されるが、3 点同時の活動は負担が大きいため、経験の分割・累積設計が論点となる。
- 成果： 卒業生の声を教育改善の入力として整理し、総合政策学部の学習経験の価値（現場経験・協働・越境）と改善ニーズ（縦横のつながり、PBL、学修環境、AI リテラシー等）を言語化できた。
- 課題： 都市型キャンパスで自然発生しにくい学生間のつながりを補う”ソフト面の場づくり”が必要（OBOG 活用、学年横断、履修者の声、読書リスト等）。

上記 2 回の議論を統合し、次年度の重点課題を「3 年次以降の学修」と「学習機会の設計（越境・協働・成果物）」として設定する見通しを得た。2026 年度への引継ぎ事項は以下のとおり。

・ 進級時（特に 3 年次）に DP 再周知と学修時間・就労に関するガイダンスを実施する。
・ 高達成学生のピアサポート（TA 等）を試行し、1 年次の学修習慣定着を支援する。
・ 越境・協働の学習機会を分割・累積で設計する（OBOG のゲスト講義・フィールド案内等を含む）。
・ 生成 AI・情報リテラシーを、学修不正対策などに矮小化せず、調査・分析の基盤能力として位置づけ、習得の機会を設ける。

[1] 25 周年 WS では、卒業生（一部在学生）が学部経験（年表）と提案を付箋で記入し、年表 157 枚・提案 93 枚を収集し（文字起こしは学生スタッフ）、在学中アンケートでは拾いにくい長期的学習経験を可視化した。詳細は下記のホームページを参照。
https://www.nanzan-u.ac.jp/yamazato60/event2025/event2025_06.html